記憶に残そう昭和の西山

資料編　目次

資料―１：周辺の変遷(日本図誌体系　近畿Ⅰ　朝倉書店　昭和 48 年５月 20 日　初版発行)
資料―２：この国に生きて(女子教育に献身の修道女「ヘルマナ・マイヤー」産経新聞 2002 年３月 24 日～3 月 29 日。全６ページ)
資料―３：宝塚市　西山地域小中学校校歌

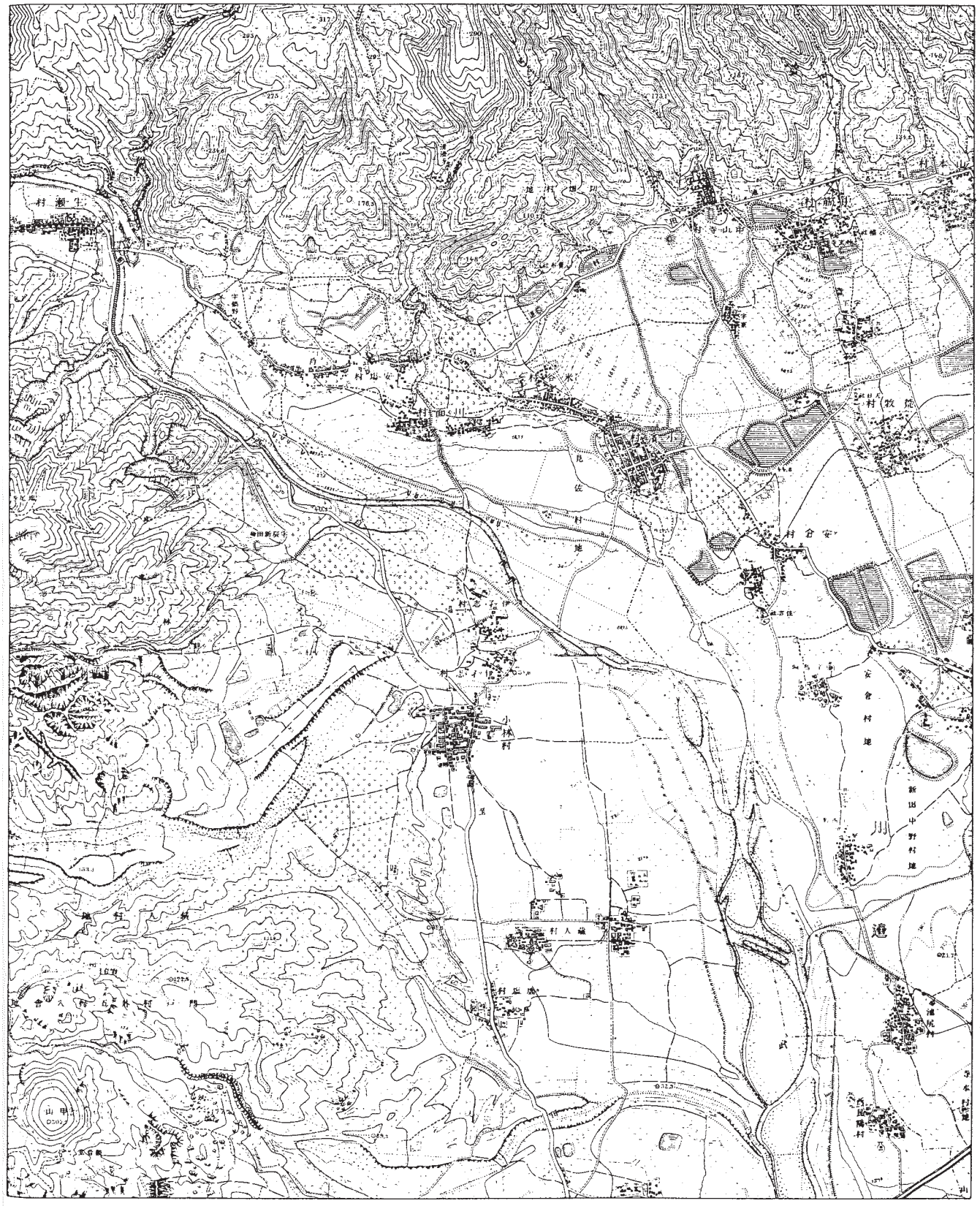


図 1 【3'】生瀬村(明19測)・西宮町(明18測)

先行性峡谷から武庫平野に流出した武庫川の谷口より下流の微地形は，図1の等高線がよく示している．左岸の東部の溜池の多い洪積低位段丘面(伊丹台地，古く猪名野と呼ばれた)の北部と，右岸の蔵人村周辺低地には方向の異る条里地割が残っている．西部の山地(六甲山系東部)の花崗岩地帯からの支流には，図 3，4 と宅地化の進行につれて護岸・砂防工事が進んでいる．武庫川の谷口には，3本の要路(南から西宮街道，東から巡礼街道．いずれも近世に発達．図2参照．前記の台地を東南から来る古代の有馬道)が集結するが，わずかに近世の宿駅小浜と生瀬(今なお街村，妻入住居が残る)が成立した程度で，猪名川の谷口の池田のような谷口集落は発達していなかった．図2に記入された阪鶴鉄道(明治32年

図 2 【3'】生瀬・甲山(明42測)

開通.のち国鉄福知山線.当時生瀬駅は有馬口駅と称した)と,箕面有馬電気鉄道(明治 43 年開通.のち阪神急行,阪急となる)の開通以後,都市形成がみられる.とくに後者が乗客誘致策として開いた遊園地少女歌劇場が,武庫川右岸の旧温泉(図1にはない)と対向して発達するのが図 2,3 に認められる(新温泉・栄町).

宝塚の鉱泉と同性質の鉱泉は,生瀬橋西南の工場記号(図2にはない)のあるウイルキンソンタンサン鉱泉会社(明治 23 年発見.深さ 9m の井戸から湧出)が採取している.旧良元村の地名ハクサリ(図 2,3)は,フッ素の多い水による歯斑病によるものとされ,有馬温泉に至る地域にも同病が多い.

図 3 【3】宝塚(明43測昭 7 要修)・伊丹(大12測昭 4 修)

図3には阪急今津線が記入され(大正 10 年開通), 沿線には整型化された住宅予定地が出現している. 同時に逆瀬川の南には, 段丘・丘陵を利用したゴルフ場がみられ, 図4で甲山(トロイデ型に似た安山岩ドーム)周辺の道路は仁川ピクニックセンターである. これらは宝塚新温泉とともに, 阪急の創業以来の沿線開発方針によって生じたもので, 宝塚線に沿う中山寺(鉄斎の書画所蔵で有名)・売布神社・清荒神などの社寺も一役買っている. 図3の六甲山麓の神戸水道の暗渠記号は, 千刈水源池(24. 三田 参照)から六甲山を迂回する上水道用のものである.

図4になると, 第二次大戦後の急速な宅地化が示され, 新興住宅都市宝塚の都市問題が織込まれている. 昭和29年(1954)

図 4 【3】宝塚(昭42改44修)・伊丹(昭42改45修)

の宝塚(たからづか)市制の施行は，必ずしも市街地形成に効果的なものであったとはいえない．中央部を武庫川が横切り，図4の東洋町(東洋ベアリング工場に因む)の宝塚新大橋も，両岸の市街地と新市役所の結合を十分に果さず，旧宝塚大橋も幅員が狭い．一方，山麓の急斜面地では，標高300m を超える地帯にまでも住宅地化し，低地・台地面の無計画な宅地は過密化を生じている．武庫川右岸の市域内部に工業地帯があり，これは公害発生源としては小規模である．戦時中の航空機工場の跡地利用の阪神競馬場は，ファンの自動車を周辺の住宅地にあふれさせている．武庫川生瀬橋北部の採石場は，騒音・粉塵のみならずダンプカーの通行による問題などを惹起し，観光・住宅都市宝塚にも深刻な問題が存在している．(池 野　茂)

この国に生きて

異邦人物語 64

女子教育に献身の修道女

ヘルマナ・マイヤー ❶

ドイツ(1877年～1955年)

生徒の心に生きるマザー

「ガードをくぐって、あとはひたすら道なりに坂を上るだけや」

阪急今津線の小林駅（兵庫県宝塚市小林）の改札口で、若い駅員にそう告げられた。

簡潔極まりない案内だったが、その通りだった。線路の下をくぐると、あとは一本道。ゆるやかな勾配がだんだんときつくなって、やがて白い塔が見えてきた。

「塔の町」―このあたりは、いつのころからかそう呼ばれるようになった。駅から南西へ約四百㍍、白い塔がそびえ立つ小林聖心女子学院は、静かに雨にぬれていた。

今から九十四年前の明治四十一（一九〇八）年元日、日本初の高等教育機関を設立するため、ローマ教皇ピオ十世の命を受けた五人の修道女が横浜港に到着した。新しい年を迎えたばかりの日本が水しぶきの向こうに見えていた。

明治時代になってキリスト教の布教が許されると、カトリックもプロテスタントも、こぞって日本に教育機関を設立し、キリスト教思想の普及に力を入れた。

プロテスタントは、フェリス女学院の前身（明治三年）、青山学院、立教学院（同七年）、神戸女学院（同八年）、明治学院（同十九年）、関西学院（同二十二年）を、カトリックも雙葉学園（サン・モール修道会、明治六年）、白百合学園の前身（シャルトル聖パウロ修道女会、同十一年）、暁星学校（マリア会、同二十一年）をそれぞれ創立した。日本人によるキリスト教主義の学校としては、新島襄による同志社が明治八年に創立されていた。

しかしカトリックのそれはいずれも、初等・中等教育機関であり、高等教育機関はなかった。日露戦争に勝利した当時の日本は、世界注視の中、急速な近代化をはかっていた。欧州のようなカトリック高等教育機関設立の要望が日に日に高まってもいた。

ピオ十世は直ちにこれに応え、二つの修道会から人材を派遣することを決めた。イエズス会と聖心会である。イエズス会の任務は男子の大学創設、聖心会のそれは女子高等専門学校の設立だった。こうして、イエズス会は、四月には早くも非公式で聖心女子学院外国人部（通称・語学校、現在の聖心インターナショナルスクールの前身）を開設する。この語学校は在留外国人や帰国子女らを相手に、英語やフランス語で授業を行った。

だが聖心会の本来の目的は、日本人の女性を対象にした高等教育機関の設立である。修道女らは、白金三光町（現在の東京都港区白金）に土地を購入し、そこに日本人女性のための学校を設立することにした。

翌明治四十二年三月には早くも待望の校舎が完成した。世界中からやってくる聖心会修道女の数も増えた。その第三陣として、ドイツ人修道女、三十二歳のヘルマナ・マイヤーが来日した。同年九月のことだった。

マイヤーは一八七七（明治十）年七月三十日、シュツットガルトに生まれた。カトリックを深く信仰する両親のもとで育ち、十五歳の時、ベルギーの聖心学院に入学した。そこで学んだ二年間は、彼女の信仰に大きな影響を与えた。やがてマイヤーは、聖心会に入会して修道女になるのが自分の使命だと感じるようになる。

一八九九（明治三十二）年、リーデンブルクの修練院に入って教師を務めるかたわら、修道女となるべく勉強を続けた。マイヤーの願いは、カトリックの教えを、海外に広めることだった。

ドイツ語を母国語とするマイヤーは英語が得意ではない。そこでロンドンのロハンプトン修院に滞在し、英語を学び、一年後、日本に向かって出発したのだった。

「私が中学に入学した年の十一月にマザーマイヤーはお亡くなりになりました。ですから私は、シスターに車椅子を押されながらほほえんでいらしたマザーの姿しか覚えていないんです」

東京都港区にある聖心女子学院の姉妹校、小林聖心女子学院（兵庫県宝塚市塔の町）の校長、山下まち子は、初代院長であるマイヤーの思い出をそう語った。

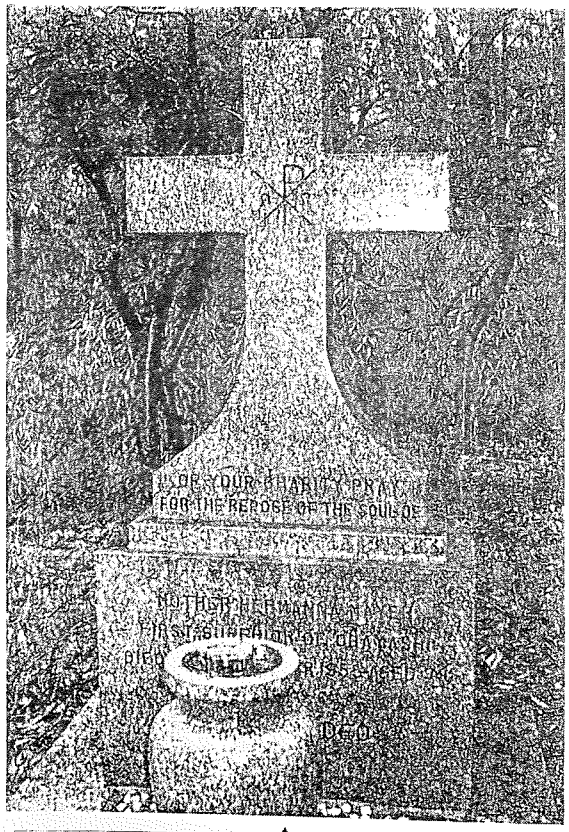
「私ですらそうなのですから、今やマザーのことを知る人は少なくなりました。でも、ここを巣立った生徒たちの中に、マザーは生きている。すてきなことです」

山下はそう言いながら、小雨に打たれる校内を案内してくれた。

関東大震災を教訓に、マイヤーが堅固であることにこだわったという建物は、あの阪神大震災にも耐えた。講堂には、聖心会の創立者である聖マグダレナ・ソフィア・バラと並んでマイヤーの肖像画が生徒を見守っていた。

構内の一角に、白い十字架が並んでいた。マイヤーもそこに眠っている。故国ドイツを離れて四十六年、日本に骨をうずめた彼女は、この国に、いったい何を残し、何を伝えたのだろうか。

（敬称略）



▲静かなたたずまいの中に建つマイヤーの墓＝兵庫県宝塚市の小林聖心女子学院

整理部　道丸摩耶

この国に生きて

異邦人物語 65

女子教育に献身の修道女

ヘルマナ・マイヤー ❷

ドイツ(1877年～1955年)

大震災…関西に学院建設

聖心の息吹を日本に根づかせる第一歩となったのは、明治四十二年十二月だった。前年、非公式の語学校を開き、白金三光町に土地を得て、ついに幼稚園、小学校、語学校の設立認可が下りたのだった。翌年の二月には高等女学校の認可も下りた。

明治四十三年四月十一日、幼稚園、小学校、高等女学校が開校した。最初の生徒は合わせて二十二人、うち高等女学校に入学したのは四人だった。

聖心の教育が目指していたのは「真の国際人の養成」である。修道女たちは、そのためには生徒を日本人として教育すること、と考えていた。欧州風の教育に偏ってアイデンティーのない無国籍人を育ててはいけない。そこで、女子高等師範学校付属高等女学校の英語教師をしていた平田トシを教頭に、ほかに五人の日本人を教師として招いた。

学院には、日本の子供だけでなく、オーストラリア、イギリス、アイルランド、フランス、ドイツ、アメリカ、カナダ、ロシアと、世界各国の子供たちが通って来ていた。日常会話はすべて英語で行われ、寄宿学校も創設された。学院一帯は、五輪開催時のように国際色豊かだったろう。

生徒たちを楽しませようと、学院で音楽会が催されることもあった。ピアノが得意なマイヤーは、ステージでパッハやヘンデルなどの曲を弾いた。

当時の修道女たちは、写真に撮られることや人前でパフォーマンスすることを避けていた。音楽会では、ステージについたてを設け、その後ろで歌やピアノを披露したという。

大正五年、ついに念願の高等専門学校が開校した。聖心会がカトリックの女子高等教育機関を創設するために日本に修道女を派遣してから八年、女性に高度な教育など必要ないと思われていた時代だった。当然、聖心高等専門学校に入学する生徒の数も少なく、四年後の第一回卒業生はわずか二人だった。

ところがこの二人が、日本中を驚かせる快挙を成し遂げる。難関で知られる文部省の中等教員資格検定試験に最年少で合格したのである。三十代、四十代の男性受験者にまじり、お付きに付き添われて車で試験場に乗り付けた二十歳の女性が合格したとあって、新聞も大きく報じた。

出身のマイヤーは敵国籍ということで相当な苦労をしたらしい。東京聖心の副院長の座からも退かなくてはならなかった。それでも彼女は、生涯、一度としてその体験を口にすることはなかったという。

東京の聖心が軌道に乗ってくると、関西地区にも聖心を開校して欲しいという声が高まってきた。実はそれまでにも一度、神戸に非公式の聖心会の語学校が作られたことがあったのだが、認可がもらえずに閉鎖となっていた。関西にも…という熱意に、四人の修道女が派遣されることになった。リーダーに抜擢されたのが四十五歳になっていたマイヤーだった。

大正十二年五月二十五日、マイヤーらは、兵庫県の御影にあったドイツ人の別荘を借り、語学校を開いた。生徒の数は順調に増えたが、今度は天変地異が襲った。

九月一日正午少し前、相模湾を震源地とする大地震が起こった。関東大震災である。マイヤーの語学校とは無縁のようだが、そうではなかった。夏休み中ということもあり、生徒に犠牲はなかったが、未曽有の大震災で東京聖心の建物はほとんどが崩れ落ちた。行き場を失った生徒たちは、マイヤーの語学校を頼って身を寄せた。決して広くはない学校は、生徒を収容できない事態に陥った。

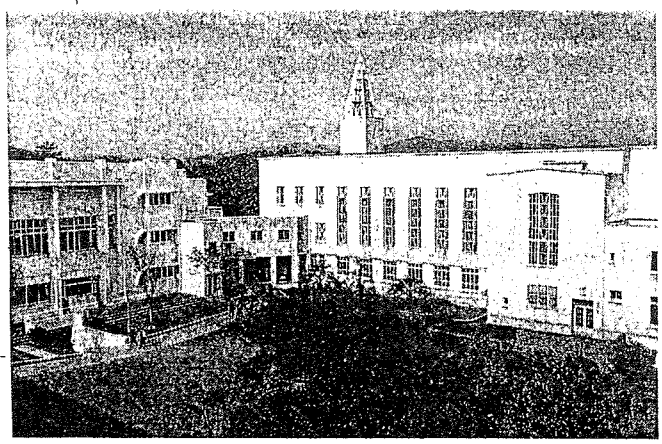
敷地内に仮校舎を建設したが、そこでの授業をいつまでも続けるわけにはいかない。マイヤーは、本格的な学院建設にふさわしい敷地を探すことにした。

そして見つけたのが、良元村小林(現在の兵庫県宝塚市塔の町)の広大な敷地だった。当時、付近は宝塚温泉で有名だった。学院用の土地は、温泉地にほど近かった。「本当にここでよいのか」と不安がる周囲の声に、マイヤーは「どこにあっても、心の持ち方の問題ですから大丈夫です」と答えたという。

大正十五年十二月二十二日、「昭和」がはじまる三日前、待望の新校舎は完成した。小林聖心女子学院の誕生である。小学校・女学校・英語専修科のすべてを合わせても生徒数約八十人という学院は、まるで私塾のようであった。寄宿生たちは、その総数よりも多い修道女たちの手厚い世話を受けて育った。マイヤーは生徒たちに「my dear children」(私の愛しい子供たち)と話しかけ、慈しんだ。

(敬称略)

いつも笑顔を絶やさなかったヘルマナ・マイヤー



白い塔がそびえ立つ小林聖心女子学院＝兵庫県宝塚市

整理部　道丸摩耶

この国に生きて

異邦人物語 66

女子教育に献身の修道女

ヘルマナ・マイヤー ③

ドイツ(1877年～1955年)

異国の地で何か困ったことが起きるたびに、カトリック関係者の間でささやかれた言葉がある。

「Go to Mother Mayer」（マザーマイヤーのところへ行け）

上智大学文学部名誉教授のクラウス・ルーメル(八五)は、「マイヤーのところへ行った」思い出を次のように話す。

昭和十八年、神学生のルーメルは滞在先の広島で血痰を吐く。驚いて医者に診てもらったところ、結核の疑いがあるという。東京に戻り、今度はドイツ人の医師にかかったところ、「絶対安静」という診断が下された。

来る日も来る日も天井を眺める日々。せっかくやってきた日本の地で何もできないもどかしさ。

そんなルーメルのもとに、ある日、大きな魔法瓶が届いた。中にはあたたかいココアが入っていた。マイヤーからの贈り物だった。

麻布の神学校に寝たきりのを余儀なくされている神学生がいる―そんな噂を聞きつけたマイヤーが、神学校からミサをあげに聖心に来る神父に持たせたものだった。しかし、マイヤーからの贈り物はそれだけではなかった。

マイヤーは、信頼できる知り合いの医者を紹介し、聖心の車で病院まで送ってくれた。診断の結果は〝シロ〟だった。

「マザーマイヤーは、まさに私の命の恩人です」

ルーメルは静かに笑みを浮かべながら感慨深げに言った。

〝廃虚〟の学院に再び命を

戦争は、二度にわたって聖心会修道女たちを引き裂いた。第一次世界大戦では敵国籍であったことから辛酸をなめたマイヤーだが、太平洋戦争では同盟国の国籍を持つ外国人となった。東京の聖心女子学院のシェルドン院長は、オーストラリア国籍だったため敵国籍となった。

満州事変の勃発以来、一触即発の緊張感漂う都会に敵国籍の修道女が院長を務める学院があっては、何かと目をつけられやすい。昭和十二年、シェルドンは小林の聖心に異動し、代わってマイヤーが東京の聖心女子学院の院長になった。

文部省は昭和十五年、外国人の校長が学校経営することを認めない、と表明した。マイヤーは校長を退き、日本人の平田トシが校長に就任した。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃によって日米は開戦、その二週間後には東京の聖心会修道院に警察官がやってきて、敵側の国籍を持つ修道女らを尋問した。

翌十七年八月には連合国側の国籍を持つ修道女たちに、国外退去の勧告があった。しかし生涯を日本女子の教育にささげるためにやってきた修道女らは、誰ひとりとして日本を離れ、母国に帰ろうとはしなかった。翌九月、修道院に再び警察官が現れ、敵国籍の修道女二十五人を軍用トラックに乗せ、田園調布にある聖女学園（田園調布雙葉学園の前身）に連れていった。三年に及ぶ軟禁生活のはじまりだった。

残されたマイヤーは、収容された修道女たちの身を案じ、警視庁の許可をもらうと、わずかな食料を手に収容所を訪れた。

ある日、学院をひとりの卒業生が訪ねてきた。小学生になる息子が病気になったが食料がなく、口に合う料理が作れない。日に日に弱っていく息子が心配だ、というのだった。

マイヤーは副院長を呼び、学院に砂糖はあるか、と聞いた。副院長は、「一斤だけあるが、緊急用なので大切に取っておきたい、と答えた。しかしマイヤーは、「私たちのところに病人はいません。今、困っている人にあげてください」。そう言って、卒業生に砂糖を渡したという。

その直後だった。学院の玄関に、大きな袋が置いてあった。開けてみると、大量の砂糖が入っているではないか。いったい誰が届けてくれたのだろうか。今もって謎のままだという。

政府はやがて、すべての外国人に東京から離れるよう伝えてきた。マイヤーらは、混雑する汽車に乗って軽井沢へ疎開した。

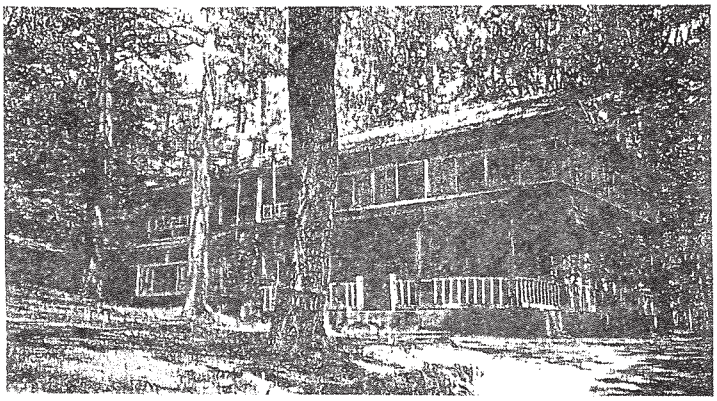
昭和二十年八月十五日、終戦。

東京の聖心の建物は、ほとんどが焼けてなくなってしまっていた。疎開先から戻り、呆然と立ちつくす修道女たちに、マイヤーは力強く言った。

「もし神様がそれをお望みで、それがいいと思われるなら、私たちにまた仕事をくださいます。私たちは心配したり、恐れたりしないで、神を信じて、もう一度がんばりましょう」

十一月には授業が再開され、マイヤーは不自由な生活を送っている生徒を励ますため、劇の上演や音楽の演奏を積極的に行った。そして二年後、マイヤーは再び、住み慣れた小林の丘にある小林聖心女子学院へ、院長として戻ることになった。

昭和二十二年十一月、マイヤーは誰にも告げず、ひっそりと東京を出発する。ただ一枚、「さよなら」と書いたメモを机に残して。（敬称略）



マイヤーらが疎開した軽井沢の別荘
＝長野県軽井沢町（ＪＡＳＨ提供）

戦災で焼け落ちた東京聖心女子学院の施設
＝聖心女子学院85周年記念誌から

整理部　道丸摩耶

この国に生きて

異邦人物語 68

女子教育に献身の修道女

ヘルマナ・マイヤー ❺

ドイツ(1877年～1955年)

「村のため」今も続く思い

手紙の差出人は、北海道の刑務所に服役している囚人だった。

小林聖心の近くで育った手紙の主は、ずっと「あの丘の上には良い人がいる。良い人たちが鐘を鳴らしているのだ」と、聞かされていたという。

「ひょんなことから罪を犯し、今は刑務所に入っているが、そんな自分を助ける良い本があったら送って欲しい」

マイヤーは早速、本を送り、彼との文通がはじまった。それだけではなく地元に住む彼の家族に食べ物を分けたりして面倒を見ていた。

村の祭りの日、彼の妹がマイヤーのもとにやってきた。日ごろのおれにと、彼女はマイヤーに「ピンクライス」(お赤飯)を持ってきたのだった。

感激したマイヤーは、ふと思う。この村では、貧しい人たちがこんなにもがんばって生きている。でも、聖心は村のために何も役に立っていないのではないか、と。

思い立ったらすぐに行動に移すのがマイヤーだ。直ちに村長を訪ね、何か村のためにできることはないか、と尋ねた。

当時の良元村は無医村だった。村長の依頼を受け、マイヤーは村に無料の診療所を作ることを決心する。

しかし、診療所を作るには当然、お金がいる。しかし、当時の小林聖心にはまとまったお金などいっさいなかった。

昭和二十五年、折しも聖心会は創立百五十周年を迎えた。世界中のすべての聖心で、記念祝典が盛大に行われることになっており、小林でも準備が進められていた。

小林聖心女子学院の卒業生による同窓会『小林みこころ会』の代表は、マイヤーに「記念事業として何か行いたいが、何がよいでしょうか」と尋ねた。マイヤーは、診療所建設を卒業生に依頼した。

そのころのマイヤーは、小林聖心設立時の過労や、戦争による心労のせいで、車椅子なしでは生活できない体になっていた。しかし、マイヤーの奉仕の心は、どんな困難の前にも決して揺るがはしなかった。診療所建設が、卒業生たちの手で進められることとなった。

卒業生の父であった阪大医学部教授、武田義章が阪大病院の医師をボランティアとして派遣してくれることになった。診療所の土地は村役場から借り受けた。

診療所のほかに、保育園を作って欲しいという要望もあった。保育園建設のための敷地を購入したマイヤーは、竹中工務店に次のようにかけあった。

「実は、私どもは、建設のための資金は今のところゼロなのです。支払いは、お金ができるまで待っていただけませんか」

建設費用は八百万円だった。当時としては破格の額である。

本来なら、払える当てのない仕事など受けるはずはない。だが竹中工務店は、マイヤーの人柄と熱意にほだされ、かつ保育園建設の公共性を認め、寄付が入るたびの分割払い、という条件で、建設を引き受けてくれた。

「ほかならぬマザーの頼みですから」と、竹中工務店の故相談役、竹中錬一が力強く答えたという話が今に語り伝えられている。

保育園、診療所は昭和二十六年九月、完成した。診療所は昭和三十九年に閉鎖されたが、聖心会の創立者、聖マグダレナ・ソフィア・バラの名前をもらって、「バラ・ホーム」と名づけられた保育園は、現在も小林聖心女子学院の近くで営まれている。

凍てつきそうな寒い風が吹く一月末、阪急今津線の小林駅からほど近い「バラ・ホーム」(兵庫県宝塚市小林)を訪ねた。

阪神大震災ですっかり壊れてしまった建物は再建され、子供たちがはだしで走り回っていた。ちょうど昼ご飯を終えて昼寝をしようという時間帯だった。パジャマに着替える子供たちが園長の中野育枝(ヒ)の姿を見つけて、大きな笑い声をあげる。

「子供たちがこんな明るく毎日が過ごせるのも、マザーマイヤーのおかげです」

中野はそう言って、目を細めた。

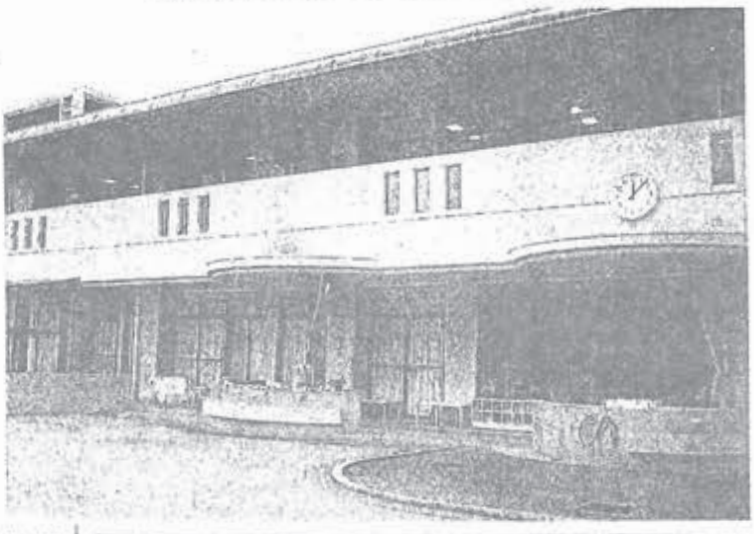
「バラ・ホーム」は、現在も小林聖心女子学院と深いつながりがある。週に二回ほど、聖心の生徒がボランティアにやってきて子供たちの世話をする。

「村のために、何か後の時代にも続いていく良いことを」というマイヤーの願いは、脈々と受け継がれているのだった。

「バラ・ホーム」の建設費は、昭和三十年十月二十五日、完済された。

しかし、肩の荷が下りてホッとしたのか、それからわずか二カ月後の十二月三十日、マイヤーは心臓衰弱のため、七十八歳で人生の幕を閉じる。

(敬称略)



阪神大震災後に再建された「バラ・ホーム」。開園当時の面影は失われた　＝兵庫県宝塚市

晩年のマイヤー(左)。車椅子なしでは動けなくなっていた

整理部　道丸摩耶

この国に生きて

異邦人物語 67

女子教育に献身の修道女

ヘルマナ・マイヤー ④

ドイツ(1877年～1955年)

生徒の争い収めた笑い声

突然、欲しいものは何かと問われても…高校生の澄子は、ちょっと考えた後、「赤い長靴」と答えた。「そう」と少し困った顔をしながら、マイヤーは「お母さんにプレゼントしたいものはありますか？」と問いを重ねてきた。母が欲しいものなんて分からない…そう思いながら澄子は答えた。「ろうそく立てが欲しい」

クリスマスが近い、ある日のことだった。元聖心女子学院校長で聖心会シスターの伊庭澄子(七〇)は、小林聖心女子学院での寄宿時代の思い出をこう語った。

一週間もたたないうちに、澄子のもとに、赤くはないがゴムの長靴と、中国から取り寄せたという立派なろうそく立て一対が届いた。

戦後間もない、誰もが貧しかった時代、学院の経営も決して楽ではなかっただろう。しかしマイヤーは、自分より困っている人を見ると、放ってはおけないたちだった。

《ふぉっふぉっふぉっ、という感じで彼女はおおもうさん級の大きなおなかをゆすって笑った》

伊庭澄子の先輩で作家の須賀敦子(一九二九―一九九八)の短編小説『寄宿学校』には、そんなマイヤーの姿が描かれている。

《夕方、六時二十分きっちりに、寄宿生は自習室のよこの廊下に、小学生をなかに半円形をつくって彼女が来るのを待つ。整列のざわざわがおさまったあたりで、彼女が廊下の角から小柄なシスター・ヘレナをしたがえてゆっくりゆっさゆっさと現れる。肥満のためすこしひずんではいるけれど、よくひびくソプラノの、つよいドイツなまりの英語で、彼女は私たちがどんなふうに一日をすごしたかを訊ねる。ちゃんと勉強しましたか。なにかおもしろい本を読みましたか》

ピアノが得意なマイヤーは、生徒が弾くショパンの響きを聞きつけては、「バッハを弾きなさい」と理由のわからないアドバイスをする。またある時は、当時はやり始めた『風と共に去りぬ』を読んでいた生徒たちに「もっと大切な本が山ほどあります」と、「ホーメーロスとかダンテとかシェークスピアとかを読める。

「子供にはベストなものにふれさせなければならない」がマイヤーの教育信条だった。「一生は決まった時間。だから、貴重な時間には良い本を読まなければ」。そう言って、寄宿生をさとしたという。

伊庭澄子さん

小林聖心女子学院の卒業生の同窓会である『小林みこころ会』が昭和五十六年に発行した会報には、そんなマイヤーの思い出が数多く載っている。

体の弱い寄宿生が寝込むと、マイヤーは夜中ずっと付き添い、優しく薬を飲ませた。少し熱が下がると、今度は、陶製の動物や小鳥の小さな玩具を持って見舞いにきたという。

「これは英語ではドッグと言いますが、日本語ではなんと言いますか？」

生徒が、「犬」と答えると、「イヌ。ドッグはイヌ。ありがとう」と、その玩具を置いて去っていった。日本語のできないマイヤーに言葉を教えてあげられた、と得意になっていた生徒は、成長して初めて学校を休んで勉強が遅れがちだった自分にマイヤーがそうして英語を教えてくれていたことに気づく。

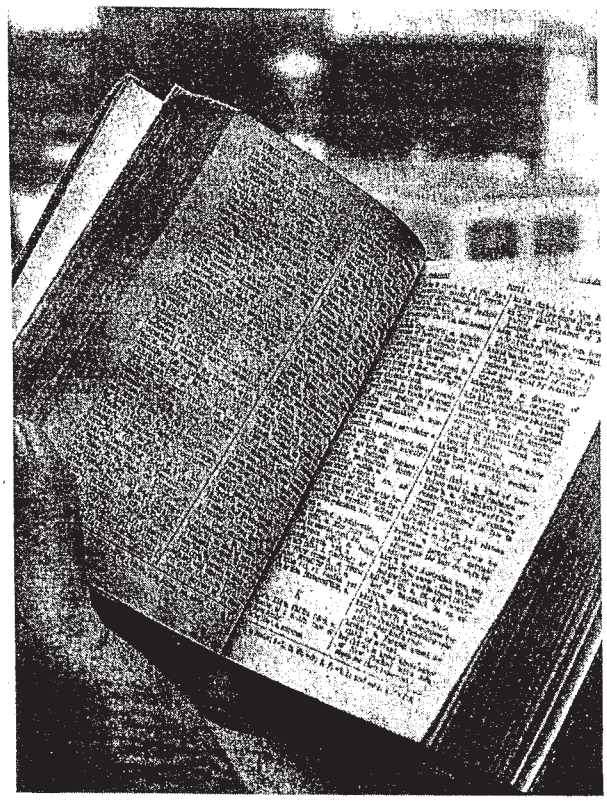
そんな教育熱心なマイヤーを尊敬していたのは、生徒たちだけではない。当時、小林聖心で音楽を教えていた遠藤郁(作家・遠藤周作の母)もそのひとりだった。

キリストの生誕を祝うクリスマスの集いに向け、遠藤の指導は厳しくなった。「そんなんじゃ、マザーマイヤーの耳に入れることはできません」を口癖に、「終業のベルが鳴るまで、ずっとステージに立たされたまま歌わせる遠藤先生の授業は、本当に大変でした」(澄子)という。

時には生徒同士で争いもあった。そんな時、決まってマイヤーは子供たちに自作の『オナミダサヨナラ』という歌をうたわせた。最初は腹を立てていた生徒たちも、歌い終わるころには、必ず噴き出してしまったという。

澄子の母は、マイヤーに会いに、しょっちゅう学院へ足を運んだ。母は日本語しか話せないし、マイヤーは英語しか話せない。

「いったい、何を話しているの？」と尋ねると、母は「確かに言葉は分からない。でも、あの笑い声を聞くだけで、いろいろな物事が、あるべきところにおさまるの」と答えたという。



▲伊庭が形見として大事に保管しているマイヤー愛用の英語辞書

当時、小林聖心には六百人から七百人の生徒がいたが、マイヤーの目はしっかりと、一人ひとりに向けられていた。

父が死んだのは、澄子が高校生の時だった。冒頭に書いた、クリスマスに何が欲しいかと尋ねられたのは、父のいない初めての冬を迎えた年のことだった。

父に代わって一家の大黒柱とならざるを得なかった母、そして寂しさを抱えてクリスマスを迎えた澄子。本当に欲しかったのは、父のぬくもり。マイヤーから贈られた長靴とろうそく立ては、そんな一家に小さくとも力強い火をともしてくれたのだった。

(敬称略)

整理部　道丸摩耶

女子教育に献身の修道女

「聖心スピリットが世界に広がれば、世の中はもっと良くなっていくと思います」

俳人・高浜虚子の孫で、自らも俳人として活躍している稲畑汀子(七二)は、小林聖心女子学院で学んだ日々を振り返りながらそう言った。

「聖心スピリットとはすなわち、マザーマイヤーの精神―〝BIG YOU small i〟の精神です」

「BIG YOU small i」。マイヤーは生徒たちによくそう言い聞かせた。常に相手のことを思いやり、自分のことは後回しに。この言葉は今でも、小林聖心女子学院のモットーとなっている。

「不況が続き、今の世の中で目立つのは、あまりにも〝BIG I〟な人たちばかりです。私は本当に小さな人間だけれど、相手のためになることがあれば、それをやればよい。マザーはそれを教えてくださったんです」

この国に生きて

異邦人物語 69

ヘルマナ・マイヤー ⑥

ドイツ(1877年～1955年)

「もっとも高きものの望め」

マイヤーの葬儀は、年が明けたばかりの昭和三十一年一月三日、小林聖心女子学院で行われた。

初詣でに向かう晴れ着の人でぎゅうぎゅう詰めの阪急電車内に、喪服姿が交じった。参列した人は千四百人を数えた。学院の聖堂で行われるはずだった葬儀は、大勢の参列者を収容するため急遽、体育館をぶっつなげて行われることになった。

葬儀には、高松宮喜久子妃殿下から花が届けられた。マイヤーが東京聖心の院長を務めていたころのことだ。常に困っている人に対する気配りであふれていたマイヤーのまなざしは、貧しさと戦う庶民だけではなく、GHQの統制下で厳しい立場に置かれていた皇室にも向けられていた。

編み物が得意だったマイヤーは、自ら先生となり、高松宮妃殿下をお招きして気晴らしに編み物の会をはじめたのだった。この集まりは『喜久の会』と名づけられ、ほかの皇族方や卒業生たちも参加して、毎週続けられた。できあがった作品はチャリティーバザーに出品された。高松宮妃殿下は、この時の縁を決してお忘れになってはいなかったのだった。

バスケットボールのゴールをユキヤナギで覆い隠した体育館での葬儀に集まった人々は、寒い日だったにもかかわらず、埋葬が終わるまで、一人として帰ることはなかったという。

「マイヤー死去」は、ラジオや新聞でニュースとして大きく報じられた。参列者の多くが涙に涙を重ね、その温かい人柄をしのんだ。

体育館から墓まで、長蛇の列が続く。すべての参加者がマイヤーの遺体に土をかけ終わるまでに一時間半が流れた。偉大な教育者、ヘルマナ・マイヤーは異国の地で眠りにつき、今も小林の学院を見守り続けている。

《男女の平等を主張するあまり、男性的になるのを誇とするのは間違いである》

マイヤーにとって、女性の高等教育とはどんなものであったのか。それを知るかぎが書き残した『現代婦人の指針』という二十数ページの書簡にあった。

《女性に必要なものは普遍的知識である。即ち母としての女性は必要に応じて教育者ともなれば経済家、医者、外交官、その他種々の地位に立たねばならぬからである》

この教えを忠実に守るべく、聖心の卒業生はさまざまな分野で活動している。

「勉強は理屈じゃなくて、たとえ学歴がなくても、自分の努力があれば、決して卑下する必要はない。常に自分を磨いていこうという気持ちがあれば」

稲畑は、聖心の教育をそう評した。

「マザーマイヤーに出会ったことが私の人生を変えた。私はマザーを通して神を見ました。マザーがいなかったら、見えもしない神を信用することなど一生できなかったでしょう」

これは、元聖心女子学院校長の伊庭澄子の言葉だ。

教えを受けたすべての卒業生の心に、マイヤーは奇跡を起こした。

「高きを望め。あなた方の眼は、いつももっとも高きものを望んでいるように。あなた方の一生は、高きものへの絶えざる努力であるように」

マイヤーの遺した言葉である。

あと数日で新学期がやってくる。マイヤーの眠る小林の丘に、希望にあふれた新入生の笑い声が響く日も近い。

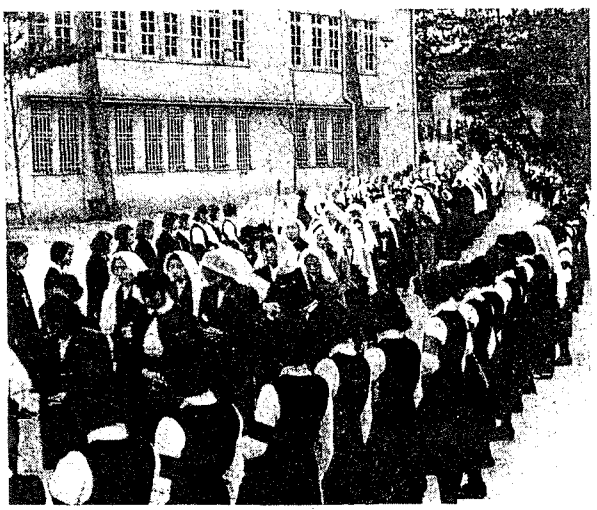
駅まで続く一本道を下る途中で、最後に一度だけ後ろを振り向いた。雨上がりの霞の空に、変わらず白い塔がそびえ立っていた。

「高く、もっと高く」マイヤーの言葉を繰り返し唱えながら、一気に坂を下りきった。

(敬称略)

＝おわり

多くの人に見守られて行われたマイヤーの葬儀
＝兵庫県宝塚市の小林聖心女子学院



次回からは「近江を愛した実業家 ウィリアム・メレル・ヴォーリズ」

整理部 道丸摩耶

宝塚市　西山地域小中学校校歌

①　宝塚第一小学校　校歌

作詞　竹友藻風
作曲　田中銀之助

１．旭ヶ丘の松林　（あさひがおかの　まつばやし）
真砂の原に色映ゆる　（まさごのはらに　いろはゆる）
学びの舎に集う子は　（まなびのやどに　つどうこは）
清く優しく凛々しかれ　（きよくやさしく　りりしかれ）

２．仰げば六甲の山高く　（あおげばむこうの　やまたかく）
涯なき空に吹き通う　（はてなきそらに　ふきかよう）
風も爽けき庭の子は　（かぜもさやけき　にわのこは）
強く明るく雄々しかれ　（つよくあかるく　おおしかれ）

３，平和の御国日の本の　（へいわのみくに　ひのもとの）
宝とならん友垣よ　（たからとならん　ともがきよ）
学ぶその身は健やかに　（まなぶそのみは　すこやかに）
こころ素直に正しかれ　（こころすなおに　ただしかれ）
（注：2003 年現在、３番は「平和の国家日の本の　（へいわのこっか　ひのもとの）」となっています）

②　西山小学校　校歌　(昭和５０(１９７５)年３月１４日：校歌選定委員会)

作詞　平尾　克三　先生
作曲　橋本　喬雄　先生

１　さわやかな朝の　すずかぜ　（さわやかなあさの　すずかぜ）
たちならぶ　ポプラの枝に　（たちならぶ　ぽぷらのえだに）
たくましく　ふくらむ若芽　（たくましく　ふくらむわかめ）
陽の光　あふれる校庭に　（ひのひかり　あふれるにわに）
美しく　こころをそだて　（うつくしく　こころをそだて）
のびゆくは　のびゆくは　（のびゆくは　のびゆくは）
西山の子ら　（にしやまのこら）

２　きよらかな　逆瀬のながれ　（きよらかな　さかせのながれ）
あたたかく　野上の丘に　（あたたかく　のがみのおかに）
はぐくまれ　生いたつ若木　（はぐくまれ　おいたつわかぎ）
手をつなぎ　肩くみあいて　（てをつなぎ　かたくみあいて）
きらめくは　われらのいのち　（きらめくは　われらのいのち）
かがやくは　かがやくは　（かがやくは　かがやくは）

西山の子ら　(にしやまのこら)

３　たからかに　くものわくはて　(たからかに　くものわくはて)
もえあがり　ひろがるのぞみ　(もえあがり　ひろがるのぞみ)
野に山に　うみのかなたに　(のにやまに　うみのかなたに)
若とりの　羽ばたきつよく　(わかとりの　はばたきつよく)
飛びたつも　きずなはかたく　(とびたつも　きずなはかたく)
むすばれる　むすばれる　(むすばれる　むすばれる)
西山の子ら　(にしやまのこら)

③　宝塚第一中学校　校歌

作詞　吉沢　義則
作曲　永井　幸次

１　武庫山おろし　吹くなべに　(むこやまおろし　ふくなべに)
昔を今に　逆瀬川　(むかしをいまに　さかせがわ)
新たなる世の　音たてて　(あらたなるよの　おとたてて)
学びの春をうとうなり　（まなびのはるをうとうなり）

２　夏はポプラの　青垣や　(なつはぽぷらの　あおがきや)
天を目ざして　枝さえに　(てんをめざして　えださえに)
陰を作らず　生いのぼり　(かげをつくらず　はいのぼり)
高き理想を　指させり　(たかきりそうを　ゆびさせり)

３　秋は名におう　紅葉谷　(はるはなにおう　もみじだに)
宝梅園に　照る月の　(ほうばいえんに　てるつきの)
光澄みつつ　おのずから　(ひかりすみつつ　おのずから)
心を玉と　みがくべし　(こころとたまと　みがくべし)

４　降るや白雪　打つあられ　(ふるやしらゆき　うつあられ)
身を鍛えつつ　冬の朝　(みをきたえつつ　ふゆのあさ)
校庭(にわ)もとどろに　踏みなすや　(にわもとどろに　ふみなすや)
ここ宝塚　第一中　(ここたからづか　だいいちちゅう)

④　宝梅中学校　校歌　(昭和３６(1961)年１２月２３日：校歌選定　発表会)

作詞　岡田　指月
作曲　酒井　協

１　八百万代に　空高く　(やおよろずよに　そらたかく)
神馬の駆けし　昔より　(しんばのかけし　むかしより)
園に床し　白梅の　(そのにゆかし　しらうめの)

その名気高き　宝梅中　(そのなけだかき　ほうばいちゅう)

２　剣が峰に　守られし　(つるぎがみねに　まもられし)
宝の塚の　ゆかりにも　(たからのつかの　ゆかりにも)
正義の誠　かざさなむ　(せいぎのまこと　かざさなむ)
文化は薫る　宝梅中　(ぶんかはかおる　ほうばいちゅう)

３　風雲何ぞ　意志強く　(ふううんなんぞ　いしつよく)
たゆまず励む　学び業　(たゆまずはげむ　まなびわざ)
心も玉と　磨かなむ　(こころもたまと　みがかなむ)
永遠に輝く　宝梅中　(とわにかがやく　ほうばいちゅう)

⑤　光ガ丘中学校　校歌「光あふれて」

作詞　小竹省三
作曲　中西　覚

１．朝　さわやかに　いのちの芽生え　(あさ　さわやかに　いのちのめばえ)
かけのぼる緑の風に　光がおどる　(かけのぼるみどりのかぜに　ひかりがおどる)
自然の恵みをうけて　(しぜんのめぐみをうけて)
英知の実り　みなぎる力　(えいちのみのり　みなぎるちから)
光あふれる丘に　(ひかりあふれるおかに)
たくましい　(たくましい)
こころとからだを鍛えよう　(こころとからだをきたえよう)

２．聞け　わきあがる　いのちの歌を　(きけ　わきあがる　いのちのうたを)
ふるさとの大地の底に　つきない泉　(ふるさとのだいちのそこに　つきないいずみ)
美しいものに寄せる　(うつくしいものによせる)
やさしい想い　価値への祈り　(やさしいおもい　かちへのいのり)
いつも　ほほえみ湛え　(いつも　ほほえみたたえ)
広い愛　(ひろいあい)
豊かなこころは　わが願い　(ゆたかなこころは　わがねがい)

３．いま　新しい　いのちの夜明け　(いま　あたらしい　いのちのよあけ)
星雲の渦巻くかなた　旅立ちの時　(せいうんのうずまくかなた　たびだちのとき)
青春　希望はあふれ　(せいしゅん　きぼうはあふれ)
こころあわせ　大空駆ける　(こころあわせ　おおぞらかける)
若い力がひらく　(わかいちからがひらく)
七彩の　(なないろの)
光の未来よ　栄あれ　(ひかりのみらいよ　さかえあれ)

ああ　(ああ)

見上げれば　光のきらめきよ　（みあげれば　ひかりのきらめきよ）
いのちの輝きよ　（いのちのかがやきよ）
いまこそ　われら　（いまこそ　われら）
限りない（かぎりない）
限りない　宇宙へのはばたき　（かぎりない　うちゅうへのはばたき）

小林聖心女子学院　校歌

１　朝に夕に鳴る鐘の　（あさなゆうべに　なるかねの）
澄みて清けき丘の上に　（すみてきよけき　おかのえに）
わが学舎の旗高し　（わがまなびやの　はたたかし）
萬の徳のもといなる　（よろずのとくの　もといなる）
聖心よりぞ流れずる　（みこころよりぞ　ながれずる）
母性の愛の泉こそ　（ぼせいのあいの　いずみこそ）

２　我等の仰ぐ聖心と　（われらのあおぐ　せいしんと）
高くかかげて進むなり　（たかくかかげて　すすむなり）
萬の国のはてまでも　（よろずのくにの　はてまでも）
萬里の波の彼方にも　（ばんりのなみの　かなたにも）
何かおそれん人の為　（なにかおそれん　ひとのため）
愛に境はなきものを　（あいにさかいは　なきものを）

３　朝日輝く桜花　（あさひかがやく　さくらはな）
大和心の咲き匂う　（やまとごころの　さきにおう）
美まし少女を育くめる　（うましをとめを　はぐくめる）
泉の流れ汲みて知る　（いずみのながれ　くみてしる）
愛にねざせる義務の念　（あいにねざせる　ぎむのねん）

４　信望愛の三つの徳　（しんぼうあいの　みつのとく）
萬の徳のもといぞと　（よろずのとくの　もといぞと）
知るや少女子聖心の　（しるやをとめご　せいしんの）
花の冠いただきて　（はなのかんむり　いただきて）
よき子よき妻よき親の　（よきこよきつま　よきおやの）

５　鑑となりて人の為　（かがみとなりて　ひとのため）
親の為又夫の為　（おやのためまた　つまのため）
子の為さては世の為に　（このためさては　よのために）
心をつくし身をつくし　（こころをつくし　みをつくし）
母性の愛を高らかに　（ぼせいのあいを　たからかに）
平和の為に尽くせかし　(へいわのために　つくせかし)

■記憶に残そう昭和の西山　参考文献

１．兵庫県地名大辞典　角川書店　1988(昭和 63)年 10 月８日発行

宝梅、野上、千種など各地の世帯・人口は 1987(昭和 62)年 4 月 1 日「統計情報みちしるべ」(兵庫県企画部調査統計課)によっています。

２．日本図誌大系　近畿Ｉ　朝倉書店　昭和 48 年 5 月 20 日　発行

３．伊丹・川西・宝塚　100 年史

４．平林寺のしおり

５．聖天さんのしおり

６．宝塚神社社務所パンフレット

７．ふるさとの想い出　写真集　宝塚　明治　大正　昭和

平地一三　山下芳雄　編　発行所　株式会社　国書刊行会

８．宝塚　宝塚市編　S39.11.24 印　S39.12.1 発行　宝塚市　淡交新社

９．宝塚市さかせ川のあゆみ　逆瀬川商和会３０周年記念誌

記憶に残そう昭和の西山　記録集

2003（平成 15）年 12 月

宝塚市西山コミュニティ協議会
（コミュニティ西山）

〒665-0022　兵庫県宝塚市野上 6-2-1
西山小学校内　ウエル西山
ファクシミリ：0797-74-6825

（この記録集は生活復興県民ネットの助成金を使って作成されました）